
ロリと私の旅行譚

骨折王子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロリと私の旅行譚

【Nコード】

N8205T

【作者名】

骨折王子

【あらすじ】

旅をするのなら、身軽な方がいい。そんな持論を持っているというのに、私は何故かロリな少女と一緒にバイク旅行をしている。ヤマモオチもなく進んで行くこの旅行譚に、帰趨があるのだろうか。

この作品は、他サイトからの転載です。

ロリと私

旅をする時は出来るだけ身軽な方がいい、というのは私の持論だ。余計な物を持っていけば荷物になるし、邪魔になってしまう。なにもなければなくした時に悲しくならないし、虚無感に襲われることもない。どこかへ旅立つのなら、身一つで行動していたいのだ。

私の背負ったリュックサックには、着まわしの衣類と、寝袋と、雨具と、水筒と、ちよつとしたバイクの整備道具と、世界地図のアプリケーションが入った携帯電話と充電器しか入っていない。それで十分なのだ。

それに足には自慢のSR400さえあれば、それ以上は何も必要ない。カメラも、手帳も、本も、パソコンも、勉強道具も、それに一緒に行く仲間すら必要ではないというのは、私の信念でもあった。必要な物を持っていない私の足取りは、どんな旅人たちよりも軽いし、狭いし、それになにより速くある。自慢のサラたん（SR400の名称。命名、私）はどこぞの小説のように喋りはしないけれど、最高の相棒だ。オンボロに見えて、かなり飛ばしている。マフラーはへたっていて、最近ではエンジンの調子が悪いせいかキックも鈍いけれど、かなりのイイオンナなのだ。

気ままな一人旅、音楽プレイヤーも持たぬ私は、無音と共に駆ける。

しかしサラたんは喋らないわけではない、と私は豪語する。

なにも知らない人間からすれば「うわ、なに言ってるんだこいつ」と思われること請け合いではあるのだが、私は間違いなく確信しているのだ。

彼女は喋る。

単気筒という口で、広い台地に向かって愚痴を言う。賢い世の中に対して苦言を呈する。バイク界のうるさがたなのだ。

「ねえ」

私の気持ちいい空想が、その声で途切れてしまう。

「それってやつぱり、バイクが喋ってるわけじゃないよね」

北の日本の広い大地。

見渡す限りが緑な視界の中、コンクリートの上を走っている最中に後ろから声をかけられた。

私は無視をしようかと思ったが、とうにギアを最大にしていたことに気がつき、間のとり方を見つけれなかった。風はこんなに気持ちよく、周囲は牧歌的な風景を映し出しているというのに、気分が沈んでいってしまう。

「っるさい。喋ってんの。サラたんは間違いなく、ここで発言してるの」

私の大して細くもないウエストに腰を回してる少女に対して、振り向きもせず怒鳴る。その声が聞こえたのか、少女は身を寄せてきた。

「エンジン入れて鍵を回せば、どんなバイクだって大地に文句を言うんじゃないの？ このサラたんじゃなくても」

なんてことをおっしゃりやがるのだろう、このロリなガールは。そこいらのSR400が喋るかは知らないが、私が食費を削ってまで磨き上げているサラたんが喋らないはずがないではないか。念力岩を通すという言葉を知らんのか。

「ちなみに、今はなんて言ってるの？」

「アンタのことが気に入らないから、後部座席から振り下ろしたがつてる」

少女が鼻を鳴らす音が聞こえた。

「あんまりスポンサーさまに舐めた口利くんじゃないって、そのサラたんに伝えなさい。わたしがいないと、まともに錆を落とすお金もないんだから」

「……だつてさ、サラたん」

——世知辛い世の中ですね。

そんなサラたんの声が、聞こえた気がした。

人間がへこんでいたって、少女が生意気だって、サラたんが喋ってくれなくなつて、タイヤは転がっていく。地球然り、タイヤ然り、丸いものはいつだって転がっていく。

「街、まだ見えないのね」

「地図のアプリは、アンタが持つてるんでしょ。見てみたらどう？
ついでに、バイクから落ちるように気をつけてね」

皮肉に気づかなかったのか、少女は器用に片手を操作して携帯を覗いていた。

「まだ何十キロもあるわ」

「そりや安穩。そんだけあれば、風になれる日は遠くない」

「それなら本物の風になつて、あつという間に目的地に着いたらいいのに」

少女が辛辣に言ったので、私は露骨にため息をついてやった。

……やはり旅は一人に限る。

どうしてこんな少女と共に旅をすることになってしまったのか、自分自身でも理解に苦しむ。一人を好み、霞を食って街から街を往く、無頼の渡り鳥。そんな信念があつたはずだというのに。

「ふん、ふん、ふ、ふ、ふーん、春色バカンスよー」

スポンサーの少女が、何か鼻歌を歌っている。

私はその80年代を思わせるような軽快なリズムに、人差し指でリズムを取りながら風を切った。

ロリとの出会い

「貴女、旅をしているの？」

北の大地を訪れる少し前。

横にある浜を夜中に走っていたら無性にお腹が空いてきたのでコンビニの廃棄を漁っていると、唐突に声をかけられた。

「え、私？」

5日ほど風呂に入っていなかったみすばらしい私に声をかける奇特な人間がいるとは思わず、反射するように振り返った。

そこには身なりの綺麗な、小学生くらいの少女が立っていた。純粹な日本人ではなか目か茶色と灰色の混ざった色で、赤毛かった茶色い髪はお上品にウェーブかかっている。

そんな少女が、大きなコンビニに袋を片手に小首を傾げていた。

「はあ、なんでそう思ったの？」

少女が、向こう側に止まっているサラたんを指さした。確かに、あの荷物を見たら旅行でもしていると思っても不思議ではないか。

「旅、しているの？」

「まあね。お金がないから、貧乏旅行だけだ」

貧乏の度を越えている金欠旅行だ。ガソリン代、それにサラたんの整備費用はどうしても外せないの、乗り手の方に回すお金はどうしても少なくなってしまう。その結果が、今のみすばらしい私の姿なのだが。

「だから、廃棄を漁っているの？」

「そうだよ。ここはチェーンじゃなくて地域密着系のローカルコンビニだから、管理マニュアルがそこまで徹底してないから、漁りやすいの」

どうでもいい蘊蓄を教えてあげると、少女は私のサラたんを眺めながら適当に相槌を打った。もしかしたら、ちゃんとしたバイクを

見るのは初めてなのかもしれない。大きめのバイクに興味がある少女というのも、また珍しいものだが。

「どこから、旅をしているの？」

サラたんを興味深そうに眺めていた少女が、こちらを向く。

何故、そんなことを訊いてくるのだろうか？

私が怪訝な顔を見ると、少女は自分の持っていたビニール袋を私に手渡した。

「これ、あげる」

「えっと、なんで？」

乞食じゃないぞ、私は廃棄を漁っているだけなんだぞ、というプライドがあるのだ。物を恵んでもらう義理も、道理もないのだから。「この廃棄、今はないでしょう？ だからあげるわ。わたしはあまりお腹すいていないから」

その代わり、と少女が言った。

「わたしに旅のお話を聞かせて」

コンビニの前に置いてある飲食用の長いベンチに腰掛けて、少女が言った。

それなら乞食でもないなと思い、私は彼女の横に座ったのだ。

ロリとのやりとり

「あつ、あつち！」

スポンサー子ちゃんが声を上げる。

「ねえ、海があるわ」

「そりゃ、北の大地だからね」

「……とても大きい」

スポ子ちゃん（少女の名前。命名、数秒前の私）が、壮観な景色を眺めていた。フェリーで北の大地まで来たときは、スポ子ちゃんは船酔いで海どころではなかったたので、この旅で海を見るのはこれが初めてなのだ。

私は運転中なのでしつかりと眺めることは出来なかったが、視界に入る海は青くて広がった。

「アンタの地元の横にある浜だって、海くらいあるでしょう」

「わたしの家は田舎だったから、海がなかったの。……それに連れて行ってくれる人もいなかったし」

それ以上はなにも言わず、スポ子ちゃんは広い海に感嘆の声を漏らしていた。

——悲しいですね。

というサラたんの声が聞こえた気がした。私は同情はしない性質なので、それには同意しかねる。ただ、そんなものなのかなとは思った。

「本当に、広いね」

私が言う。

「大きな水溜りみたい」

「ずいぶん夢のない言い方ね。他に感想はないの？」

「そう？ この水が全部ダムだったら便利なのに、とは思っけど」

「にべもない。これが全部ダムなら、海のお魚が食べれなくなってしまうわ」

「私は魚が苦手だから、構わないんだけどね」

でも漁師の人が失業したら国が困る、と私が続ける。

スポン子ちゃんは、いやそうな声を漏らした。

「つくづく貴女って現実志向なんだか、非現実志向なんだか分からないわね」

「現物志向なの。見たものしか信じないし、出た牌しか切れない」

「っていうことは、未来が見えなかったから、こんなことをしてるわけ？」

私が口ごもると、スポン子ちゃんは嬉しそうにケラケラと笑った。

別に学力がなかったわけでもなかったし、両親がお金がなかったわけでもなかったし、努力をする気がなかったわけでもなかった。大学全入なんて言われている時代、入ろうと思えば大学に入れたそれにちよつとでも努力をすれば、そこそこの大学にだって入れただろう。

それでも、私は進学という道を蹴った。

大学が不必要だとも思わなかったし、時間の無駄だとも思わない。社会に出るために、必要なことをたくさん教えてくれるのだろう。それに今までに会ったことのないような友達だって、いっぱい出来たかもしれない。

明確な理由は、なかったのだ。

『あ、別に行かなくてもいいか』

そのくらいの感覚で、私は進学をやめてしまった。そして程の良バイトを見つけてお金を貯めて、卒業後の軍資金としたのだ。

バイクはいい。

カッコ良くて、速いから。

一人旅もいい。

気楽で、楽しいから。

その程度の理由で、私はバイクで旅をしているのだ。

まあその当時は、こんなロリがスポンサーになるなんて思わなかったけれど。

「ねえ、止まってくれない？」

「なんで？」

「海、写真に撮りたい」

スポ子ちゃんのバッグには、体に似合わない大きな一眼レフと手帳しか入っていない。お金はチェーンをつけてパンツの中に入っているし、カード類は私が預っているから、それっぽっちしかないのだ。

「写真撮って、どうするの？」

「どうもしない」

「じゃあ止まんない」

サラたんだって、今はぶっ飛ばしたい気分だと言っている（気がする）のだ。

「それにアンタだって、早く目的地に着いてほしいって言ってたでしょう」

「……でも、こんなに綺麗なのに」

スポ子ちゃんが噛みついてくる。

「写真に撮らないなんて、もったいないわ」

「こんなに大きな海が、小さなフレームに収まるわけがないでしょうが」

「ねえ、サラたん。この乗り手にスポンサーに逆らうなって伝えてちょうだい」

なかなか皮肉が効いている返しが気に入ったので、私は止まってもやることがなかった。

左に方向指示器を出し、ギアを3速まで一気に落とし、クラッチを徐々につないで回転数と速度をあわせる。後部座席のスポ子ちゃんがつんのめり、私によりかかってきた。右足をゆっくりとふみこ

み、後輪ブレーキで速度を落とす。クラッチを切ってから左の路肩にバイクをよせ、後輪ブレーキと一緒に今度は前輪のブレーキもかけて、速度を完全に殺しにかかる。車体が完全に止まる寸前にいちどブレーキをゆるめて、停車時の負荷を消してから改めてブレーキをかけた。完全に停車してから、ギアをニュートラルまで落としてサイドスタンドを引き出し、車体を預ける。

スポ子ちゃんが降りたのを確認してから、エンジンを切ってハンドルを左に目一杯切る。キーを押し回してハンドルのロックし、そこで私はようやくヘルメットを取ることが出来た

着ていた茶色いロングコートの前ボタンを開ける。春口だと言っても、ロングコートに黄色いマフラー、それにGパンというのは少し暑かった。

「うわあ、広い！　ねえ、すごく広い！」

年齢に見合う様で、スポ子ちゃんのはしゃぐ。デフォルメされた猫のプリントが入っているヘルメットを放って、両手を広げた。

「ええ。それに、やっぱり水溜りみたい」

確かに、海は広がった。

私は京の都生まれなので、あまり海とは関係が深くない。流石に初めてということはないけれど、見慣れているというほどでもなかった。

海は太陽の光を反射して煌めいていて、思わず目を細めてしまいたくなるほど気持ちの良い眺めだ。

スポ子ちゃんがバッグから一眼レフを取り出して数枚撮ると、すぐにはまってしまった。

「もう撮らないの？」

「肉眼で記憶にとめておくのが、一番いいものね。あまり写真に撮りすぎるのは下品なのよ」

カメラ愛好家に喧嘩でも売っているのだろうか、このロリスポンサーは。

いや、もしかしたら、カメラを愛する人たちも、一つの物を何枚

も撮らないのかもしれない。私にはよく分からないが、カメラ片手にしてじつと景色を眺めている人はよく見かける。それは、この口リ少女と同じようなことを思っているのかもしれない。

私は指で四角形を作って、その中を覗いてみた。

「どうしたの？」

別に、とにべもなく言う。

「フィルターを通したら、海がどう見えるのかと思って」

ロリとの出会い 2

「へえ、そんなことがあったのね」

「うん、あれは大変だった。おまけにエンストしちゃってさ、普段ならそのままやり直せるんだけど、テンパっちゃって。車にも煽られて散々だった」

少女が笑う。

私は温かい缶コーヒーが嬉しく、ぺらぺらと旅行譚を話していった。少女はよほど旅行というものに興味があるのか、質問を挟みながらよく話を聞いてきた。

「……ねえ、旅をするのって楽しい？」

一通り話し終わった後で、少女はそんなことを尋ねてきた。

「愚問だね」

私が即答する。

「相棒のサラたんとの二人旅は、最高に楽しい。君は旅行に行ったことないの？」

少女が顔を伏せて、かぶりを振る。

「ないわ。この街からも、出たことがないの」

「それはもったいない。外にはいろんなものがあるのに」

言うほどもったいないとは思っていない。そういう暮らし方もあるし、ひとつの街から出ないのだって一つの生き方ではある。

しかし少女は、数度深く頷いた。

「わたしもね、一度でいいからこの街から出てみたいの」

「出たらいいじゃない。新幹線でも、飛行機でも、青春18切符でも、好きなもので旅行に行きよ」

「一人では、難しいわ」

「なら、親と一緒に رفتらいいのに」

「……お父様もお母様も、忙しいから」

しょうがないの、と少女は苦笑する。その顔は、あまりに年齢不相応だった。

このくらいの年の子は、馬鹿みたいでもいいから、とにかく笑っていないてはいけない。そうでなければ、この先も一生ちゃんと笑えない。

なんとなく、そんな気がした。

「なら尚更、旅に出た方がいい」

分らないというように、少女は小首をかしげた。

私は胸を張って、その言葉を選んだ。

「旅に出たい、旅に出たくてしょうがない。そんな風に思っているなら、絶対に行った方がいい。それは多分、一番旅を楽しめて、一番旅で成長できる時だと思うから」

旅は人を大きくさせると、私は思う。

日々の生活で培われていく人間の力とは、まったく別のところ。

それを成長させてくれる。拘泥してしまった思考を一新させ、また違った物の見方を教えてくれるような、旅はそんな教師でもあった。「そうなの？」

懷疑そうに、少女は尋ねる。

「少なくとも、私はそう思うよ」

もちろん、私みたいに旅ばかりしている人間はしょうがないけれど。旅で出来る成長があるように、日常を積み重ねなければ出来ない成長もある。むしろ、後者の方が圧倒的に多いはずだ。

まあ、旅が日常になってしまえば色々……。いいか、これは。とりとめがないし。

「だから君も、なんでもいいから旅行をしてきな。好きなところへ行って、好きなものを見てくるといい。海でも、山でも、寺でも、人間でも。それで君に思うところがあるのなら、それが成長だと思うよ」

ははっ、と自分の鼻っ柱を掻きながら笑う。年下相手に、ずいぶん説教臭いことを言ってしまった。そんな自分が恥ずかしく、照れ

てしまったのだ。

しかし少女は、その言葉を真摯に受け止めていた。深く頷き、私の方をしっかりと見ている。

「……わたしも、旅に出てみたいわ」

そう言った少女に、私は嬉しくなった。

「そっか。なら、君はどこに行きたいの？ 具体的じゃなくても、それっぽいところなら私が教えてあげられるから」

少女が、頬に手を当てて首をかしげる。「そうね……」と言って、遠い目をした。

「強いて言うのなら、海に行きたい」

「海かあ」

海と一口に言っても、色々とある。沖な縄の綺麗な海とか、東の京にある汚くも活気のある海、それに北の大地にある広がるような海。

少女が一体どれを見たいのか、検討がつかない。

「なら、海以外には何が見たい？ もうひとつ絞って、海とそれが見えるところに行ったらいい」

少女が、遠い目から近場の私に視線を移す。

そして覗き込むように私を見てきた。

「考え付いた？」

「ええ、思いついた」

そして堂々とした面持ちで、私を指さした。

「貴女を、見ていたいわ」

あまりにも堂々とした態度に、私は面食らってしまった。

ロリとのやりとり 2

やはりバイクは、走っている時が一番カッコ良い。

その流線型（厳密には違うが、走るための造形ではあるし）とも言うべきシルエットをいろんな角度から眺めて「このカーブがいいねえ！」なんて愛でるのもいいのだが、やはり乗り物は動いている時が一番輝いている。止まっているバイクは模型で事足りるわけだし、機能美に準じているのなら動いてナンボなのだ。溢れる想いは流線型によって、突撃バイクロードなのである。

早々に5速になったバイクは、風をかき分けて行く。私とスポ子ちゃんを乗せたサラたんは、景色を思惟する暇すら与えずに駆けて行く。

「まだ海なのね」

「これからも、ずっと海だろうね」

「独特なおいがするわ」

「これからも、ずっとするだろうね」

それが嬉しいのか、スポ子ちゃんはぼーっと海を眺めているようだった。

海は、見ている人に色々なことを想わせてくれる。というのは、どこかで読んだ一文だ。もしかしたら、哲学者の言葉だったかもしれない。私は海を見て「水溜りだな」くらいにしか思わないけれど、見る人が見れば、きつと然るべき想像にふけるのだろう。

「……お父様とお母様、心配しているかしら」

少女は、そんなことを想ったらしい。

「置き手紙もしたし、たまに留守電も入れてるから大丈夫でしょ」
スポ子ちゃんは隔靴搔痒というように、口ごもらせた。

そういうことではないのだ、ということだろう。

「案外、アンタがいなくなっていたことも気づかなかったりしてね」
茶化すように言ったが、スポ子ちゃんは答えなかった。

——心配、しているといいですね。

サラたんが、そんなことを言っていたような気がする。待つ身はいても特別気にしていない私としては、この少女を不憫に思うことくらいしか出来なかった。

心配するような人間のいないこの少女と、心配する人間がいようが気にもしない私。

幸せなのは、一体どっちだろう？

答えは簡単。

少女は置かれている環境が可哀想で、私は私という存在が可哀想なのだ。

ロリとの出会い 3

「私？」

どういう意味かわからず、聞き返す。

「私が見たいって、どういうこと？」

「貴女が今後どんな旅をするのか、わたしは見たいわ」

少女は、私ににじり寄ってくる。私は思わず、身を引いてしまった。

「それは、私と一緒にいきたいってこと？」

少女は迷ったように首をかしげてから、やがて首を縦に振った。

「いやいや、連れていけないよ？」

「なぜ？」

「だって君、小学生でしょう？」

それがどうしたのかと、少女が目を細めた。

なんで分からないのかと、ため息をついて飽きてしまう。

「親の許可がなかったら、誘拐になっちゃうよ。別に前科がつくのは怖くないけど、両親が心配するのはいただけないよ」

「……その心配はないの」

少女の顔に、ふっと影が落ちた。

幼い顔が、卑屈に歪んでいた。

「わたし、ちよつと邪魔者みたいだから」

ちよつと邪険にされたくらいの顔ではないように見える。

義理も縁もないというのに、なんとなく放っておけない気がしてくる。

「どういうこと？」

そう尋ねると、少女は私の後ろにあるコンビニを指さした。ローカルなコンビニが、目がチカチカとするような光が灯っている。

「ここ、わたしのお父様が経営しているの」

だからそれは無料なの、とビニール袋を指さした。

口に咥えていたコーヒーマグの空き缶が、急に居心地の悪いものとなる。

「こんな地元密着型のコンビニがあるくらい、どうしようもない田舎なのよ。だから未だに、地主さんが力があるようなところなの」
なるほどね。

何故、廃棄がないと知っていたのか疑問だったのだが、そういうことだったのか。

「それなら余計、子供を気にしそうなものだけだね。大事な大事な娘さんなんでしょう？」

年齢に見合わない様子で、少女が肩を竦める。その外見も相まって、外国のホームコメディのようだった。

「つまらない、よくある話だけど、跡取りは女じゃ駄目だったみたい。でも弟はどうやっても生まれなかったから、お父様とお母様は大喧嘩。お母様は実家に帰って、お父様はわたしに興味がなくなつた。それで、夕食もコンビニのご飯」

少女が自嘲する。

「っていうことで、わたしには誰も心配するような人がいないのよ」
問題はないんだから、連れていつてくれるでしょう？ とでも言うようだった。

あまりにも図々しい態度に、私は顔をしかめてしまった。子供は嫌いじゃないのだが、ここまで大人びた上にわがままを言われてしまつと、こちらとしても気分が良いものではない。

「……だからって、君を連れていく理由にはならないね」

「そうなの？」

「私は気楽な一人旅が好きなんだ。君を連れて行ったら、気苦労のほうが多いよ。費用もかかるし、時間も制約されるからね。メリツトがない」

「あら、わたしを連れていつてくれたら、悪いことはないわよ？」
そう言つて、少女は財布を取り出した。その中に入っているキャ

ツシユカードを抜き出し、ひらひらと振った。

「この中には、多分何百万単位でお金が入ってる」

私は笑ったが、少女は真顔だった。

真偽を確かめるように少女を睨んだが、少女は目を逸らすことも動揺するもなかった。私はこの旅で嘘を見分ける力を身につけたが、そのセンサーが反応しない。

どうやら、本当のことらしかった。

「そんなに、どうしたの？」

「使い道が分からなくて、貰っていたお金をすべて貯金していたのしれっと、そんなことを言つてのける。少女が貰ったお金を何年貯めたら、そんな額になるというのだろうか。おかしな金持ちの感覚に、なんだか聴覚をおかしくされているような感じになった。

もしかして、私の方がおかしいのか？ 腹が減ったらコンビニをあさって、なければクモでも霞でも食べていた私の感覚の方が、おかしくなってしまうているのだろうか？

「もし、わたしを連れていってくれたら、このカードをあげるわ」

「……はい？」

「だから、わたしを連れていってくれるのなら」

少女が、不敵な顔を浮かべる。

「貴女のスポンサーになってあげるって言っているの」

お金などに興味がないと言わんばかりに、カードを手渡してくる。私は去就に迷う暇すらなく、それを受け取ってしまった。

「交渉成立ね」

受け取った私を見てから、にやりと少女が笑った。

「まったく……。アンタ、いい性格してるわ」

「お褒めに預かり、恐悦至極ね」

少女は私の返事を聞くこともなく、私のサラたんの方へ歩いて行ってしまった。

「ちょ、ちよつと、本気で行くつもり？」

渡されたキャッシュカードを持ちあぐねながら、少女に尋ねる。

「もちろん」

「いやいや、その格好のまま行く気？　なんの準備もしないままなんて、無理でしょう？」

「そんなことないわ」

勝手にサラたんに飛び乗った少女が、こちらへ振り向いた。

その少女は、いままで一番の笑顔を浮かべた。

「だって旅には、余計な物を持っていかない方がいいでしょう？」
少女が言う。

「余計な物を持って行くと、旅で拾ったモノをしまえないもの」

ロリと私 2

日が落ちる。

夕方には到着すると思っていたのだが、まだ目的地まではだいぶある。目にしみる紅色の海を眺めながら、サラたんはまだ走っていた。

「リーリかるー、とかれふー、きるぜむおーるー」

私がい与えた猫の肉球が印刷されたヘルメットから、ずいぶん物騒なメロディが聞こえてきた。

「まだ着かないのね」

「あとちよつとだから、我慢しなさいって」

本当はまだしばらくかかりそうだったが、適当に言ってやる。

しかしながら、少女は不平を言うことはなかった。

「……もうしばらく、着かなくてもいいかも」

いつもは早くつけとやかましくてしょうがない少女の豹変ぶりに、少し驚いてしまう。

「なんで？」

「海、綺麗だから」

夕暮れの海というのは、確かに違った趣がある。なんとなく優雅で、なんとなく優美な雰囲気があった。

……やはり、海というのは見ている人間に色々と思わせるようだ。私も柄にもなく、ふと思考が過ぎってしまった。

「海、見たね」

「ええ」

「目的は、もう達せられた？」

後ろの少女が、「うーん」と声を漏らした。

その声の調子では、まだなにか足りないらしい。

「まだ……もう少し、足りないかな」

「そう」

短く答えると、私たちはお互いに黙ってしまった。私は進む方向を、スポ子ちゃんはずっと海を見ているようだった。

私たちが黙っていても、サラたんは進んでいく。

ずんどこずんどこ、大地に文句を言いながら進む、進む、進む。

「……じゃあ今度は、沖な縄の方にある海を見ようか」

唐突に、口火を切った。

「え？」

「海って一括りに言っても、いろいろあるよ。南の海は、こっちよりも透き通っていて、変わった色をしているんだって」

「それは、見てみたいわ」

でも、と少女は続けた。

「貴女はいいの？ 日本一周の計画が、めちゃくちゃになっちゃうんじゃない？」

気兼ねするように、尋ねられた。

私はそれに、年上の余裕を携えて軽快に笑ってみせた。

「ねえ、サラたん。スポンサーさまの言うことには、逆らえないよね？」

——そうですね。

という、サラたんの声が聞こえてくるようだった。

スポ子ちゃんは気を悪くしたのかどうなのか、私の背中を叩いてきた。

「でもその代わり、時間がかかるよ。ここからまた船に乗って青い森に行つて、そこからゆつくりと南下していくんだから」

「望むところよ。お金の面は、スポンサーに任せなさい」

「ははっ、そりゃ頼りになるね……」

自分より何歳も下の子に金銭面を頼るのは、なかなかに情けないことなのだが。

まあ、それもいいだろう。

なにせ、私は無頼の旅カラス。これは気ままなバイク旅。そして

この少女は、気楽な金持ちロリガールなのだ。一体誰に、気を使うことがあるというのだろうか。

サラたんは、ずんずん走っていく。彼女もまた、なんの気兼ねもなくただ進んで行くのだ。

バイクはいい。

カッコ良くて、速いから。

一人旅はいい。

気楽で、楽しいから。

二人旅は……。

「……ま、悪くないよね」

「なにか言った？」

「いいや、なにも」

二人旅はいい。

旅で拾ったモノを、二人で共有できるから。

私が誘拐犯として逮捕されることも、諸事情で少女が実家へ連れ戻されることも、二人揃って飢え死にすることも、サラたんが異次元の街へ到着することもなく、軽快な音と共に走っていく。

ロリと私の旅行譚は、気の向くまま、風の向くまま進んでいくのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8205t/>

ロリと私の旅行譚

2011年6月4日20時55分発行